

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02177

研究課題名（和文）カント哲学の情動性——『判断力批判』からの究明

研究課題名（英文）Emotions in Kant's Philosophy; From the Viewpoint of Critique of Judgement

研究代表者

竹山 重光 (TAKEYAMA, Shigemitsu)

和歌山県立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：60254520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：いま現在でも統一的な見解を欠き、その主眼点についてすら論争の対象ともなるカントの『判断力批判』は、人間の具体的個別的な自然事物についての認知の成立とその構造を解明するのである。しかも、その成立と構造には情動（感情）が深く連関している。『判断力批判』は、人間的な認知もしくは知の成立の基盤もしくは前提そのものの、情動的体験を取り扱っているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カント哲学について情動（感情）を語ることは、一見したところ奇異に感じられるかもしれない。しかし、『判断力批判』のテキストを直接つぶさに読むならば、そして情動という人間の能力を現代の研究動向をも参照して捉え直すならば、カント哲学の情動性は明らかであり、人間の経験的現実において情動がもつ重要性も明らかになってくる。こうした解明を通じて、より十分な人間理解への道筋も拓かれるであろう。

研究成果の概要（英文）：Kant's >>Critique of Judgement<< explores our cognition about particular, individual natural things -- its formations and structures. And these formations and structures are strongly linked to emotions (or the faculty of feeling). >>Critique of Judgement<< elucidates the emotional experiences of the base or prerequisite of our cognition of knowledge.

研究分野：哲学原論・各論

キーワード：情動 カント哲学 『判断力批判』 個物経験

1. 研究開始当初の背景

人間がもつ能力の一つである情動あるいは感情をまるごとの人間存在においてどう位置づけるか。これは長い伝統をもつ問題だが、おおまかに言って近代以降、感情よりも知性、情動よりも認識が上位もしくは本質的とされることが多いと判定してよいだろう。本研究の対象であるカント (Immanuel Kant, 1724-1804) の思想についても同様の理解がなされてきており、理性の支配のもとで人間の自律性を、さらには自立性を考えることが自明であるかのごとくみなされてきた。

しかし、20 世紀末葉以降、いわゆる人文社会科学と自然科学の多分野を横断するかたちで、情動の理解ならびに位置づけを刷新する研究動向が盛んである。そこでは明確に、情動の認知的な意義や合理性が主張されている。

そこで、カントのテキストを虚心坦懐に、そしてつぶさに読むならどうであろうか。『純粹理性批判』でも、人間理性はあくまで欲求能力である。そうでなければ弁証論的諸問題は生じてこない。『実践理性批判』や『基礎づけ』で、道徳法則は人間の行為主体に尊敬の感情とともにたちあられてくる。そして、『判断力批判』が快不快の感情という心的能力を批判的考究の対象としていることは見誤りようもない。とりあえずいわゆる三批判書に言及しただけだが、それだけでも、カント哲学は実のところ情動性との深い関係をもっているとして十分に推定できる。そしてそういう自己理解を、カントは『判断力批判』を実際に執筆する直前に「そのようなものを見つけるのは不可能だろうと考えていた」「新たな種類のアプリオリな原理」[eine neue Art von Prinzipien a priori]を「発見」[entdecken]した、という仕方 で形成したと考えられる (1787 年 12 月 28 日づけラインホルト宛のカント書簡)。

本研究は以上のような事態の確認と、この事態についてなされてきた誤解もしくは軽視を背景として立案された。

2. 研究の目的

上記を背景として、本研究は『判断力批判』を考究対象として正面に据える。しかも、美学もしくは芸術論、さもなくば生物学の哲学といった、既存研究の多くに認められる接近様式を採るのではなく、同書を人間の現実的で個別的具体的な経験の成立と構造を究明するものとして統一的に理解することを目指す。同書が判断力という能力を論じている以上、実はこれが最も妥当性の高い接近様式である。なぜなら、判断力という能力は論理学用語で言えば特殊と普遍とに、存在論的に言えば個物と一般とにかかわるのであり、両者を媒介して、認識を、知を生成させる能力だからである。

『判断力批判』でカントは、そのような能力としての判断力を、快不快の感情という能力と、はっきり強く結びつけている。この洞察をそのまま受けとめるべく努力しなければならない。なぜならこれは、人間の現実的で個別的具体的な経験、認知の成立の場面に、情動 (感情) が強く関与するという洞察とみなされうるからである。それゆえに、本研究は人間の現実的で個別具体的な経験成立に情動が認知的で合理的なものとしてかかわることを、『判断力批判』のテキスト読解を通じて明らかにすることを目指す。これを通じてさらに、カント哲学全般にわたって情動のもつ意義、カント哲学の情動性を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

そもそも『判断力批判』の研究は国内外を問わずいまだ不十分なところを残すと言わねばならない。ドイツにおけるカント研究の泰斗オトフリート・ヘッフェ (なお、彼の著書を翻訳して出版することができた) が、カントを専門的に研究する者でさえ『判断力批判』を必読書としていない、という慨嘆すらこぼしているほどである。したがって、研究はまず『判断力批判』のテキストそのものの読解にあらためて力を注がなければならない。そしてその作業のためにも、情動 (感情) 概念の理解を刷新する現代の情動研究を参照し、いわば生産的な対話をなす作業をなさねばならない。そこで、本研究の取り組む作業はより具体的には以下になる。

(1) 判断力という能力がかかわる「普遍」[das Allgemeine]と「特殊」[das Besondere]という論理学的な概念そのものを再検討する。カント当時の論理学について歴史的確認をするのみならず、現代の論理学ならびに論理学の哲学をも参照して、特殊あるいは個物に遭遇しそれを捉えることそのものを反省的に考究する。

(2) カントは『判断力批判』で複数回、「人間の知性 (悟性) [Verstand] には規定できない、それによっては規定されない」という旨の文言を記している。『純粹理性批判』だけを視界のうちに据えている読者 (さらには研究者) であれば、これは意外で奇妙な発言に思われるだろうとすら言える。いったい知性はなにを規定できないのか、それはなぜ規定されないのだろうか。本研究はそれが「特殊な」「個別的な」[einzeln]といった形容詞をもって指示される事物であること

をテキストにもとづいて明らかにする。

(3)『判断力批判』でアприオリな原理として登場する「合目的性」[Zweckmäßigkeit]の原理を、美しいもの・崇高なもの、そして生命あるものとの連関で捉えるだけでなく、具体的個別的な自然事物についての認知の成立をつかさどる原理として捉え直す。

(4)『判断力批判』で初めて鍵概念として登場する「認識一般」[Erkenntnis überhaupt]の概念を、これと実質的に同様と考えられる諸認識能力の「戯れ」[Spiel]の概念とともに、情動的な体験として明らかにする。この概念にみられる「一般」[überhaupt]という語彙、つまり、カント哲学においては事柄成立の「可能性の条件」の次元を指示する語彙に着目して、『判断力批判』の考究がとどのつまり人間的な知を成立させる基盤あるいは前提そのものの体験であることを、さらにその体験が情動的なものであることを、明らかにする。

(5)現代の情動研究を参照・検討して、理論的認識がもつような合理的・認知的な性格とは区別可能なものとしての、情動の合理性・認知性を追究する。カントはしばしば「知的」という形容詞や「純粋な」という形容詞を情動(感情)に付加する。これは理論的認識がもつ合理的・認知的な性格を指示しているのではあるまい。角度を変えて述べると、情動に独特の合理性・認知性があるのではなかろうか。そのような合理性・認知性が適切に確認されれば、『判断力批判』をより十分な仕方でカント哲学の体系内に位置づけることができるはずである。また、カント哲学全体の情動性もより十分な仕方で明らかになるはずである。

4. 研究成果

COVID-19の流行にともなう多種多様な事柄によって、とりわけ教育機関としての大学におけるもろもろの業務の致し方ない激変とそれへの対応によって、学術研究の営みはおおきな打撃を受けた。研究成果として挙げうるものは、当初の目論見からすれば乏しくなったと認めざるをえない。それでも、論文とみなしうるものを公にできたし、直接の関係は薄いとしても、情動という問題につながりうる文章をいくつか書くこともできた。

(1)「穏やかな憂鬱 カント理解のためのノート」

比較的若い頃のカントがみずからの講義を聴講していた学生のあまりに早い死という状況に置かれ、その母親に宛てて遺した特徴的な文章である『フंक早世』を考察の出発点として分析・考察を行ない、この世界に住まう人間がこの世界にあるかぎり基盤的にひたされている根本気分[Grundstimmung]を、カントから掘り起こすべく試みた。取り出されたのは「穏やかな憂鬱」[die sanfte Schwermut]という情動である。

この情動は、人間という存在者が住まう「世界のなりゆき」[Weltlauf]が、人間が生きているかぎり倦まず描き立て続ける「計画」[Plan]を破壊するという明白な事実、反省を向けることで生まれてくる。人間の計画は世界の偶然によって打ち砕かれるのである。カント倫理学における道徳法則や定言命法もこの脈絡を顧慮しながら理解しなければならないわけだが、それはいまは措くとして。カントによれば、穏やかな憂鬱という気分には「どんな偶然も予期されるものではない」のだが、同時にそのような人間の魂は「静やかに晴朗」[原文の表現は eine ruhige Heiterkeit der Seele]である。

みずからの計画や意図に沿わない、場合によってはそれらに反する世界のなりゆき、有限な人間がどれほど熟練を發揮し工夫を凝らしても、人間からすれば理解不能な偶然の経験、その経験にともなう心沈む情動が、快不快のどちらなのかと考えるとすれば快とみなしうる、おだやかで放下した晴朗さと重なり合うのである。こうした根本気分を確認することは、『判断力批判』のみならずカントのほかの著作を読解するにあたって、重要な助けとなるだろう。

(2)「友よ、友なんて、いない カント理解のためのノート」

カントは『人倫の形而上学』第2部をなすいわゆる「徳論」[Tugendlehre]の終わり近くで、長きにわたる議論の前史をもつ論題、「友情」[Freundschaft]を論じている。費やされている紙幅は少なく、これまで十分に注目され検討されてきたとは言いがたいが、論題として重要であることに疑いはない。むしろ、不当にもないがしろにされてきたと判定するべきであろう。

カントによれば、友情は「徳の義務」[Tugendpflicht]であるところの「他者にたいする義務」がそこに由来する、「尊敬」[Achtung]と「愛情」[Liebe]という情動的なものを構成要素とし、それら二つの「最も緊密な結合」によって生まれるという。

ここで本稿は、「他者にたいする義務」の対概念である「自己自身にたいする義務」を取り上げた。管見によれば、カントの友情概念を扱った研究では後者の観点から友情概念を検討することがほとんどない。これは不適切と思われる。というのも、自分がいかにあるか・あるべきか・ありたいかが、友情の成立と無縁だとは考えられないからである。友情の成立はそもそも相手のある事柄であって、相手のありさまをコントロールすることは原理的にこちら側にはできない。こちら側に行えることは、自己自身にたいする義務にかかわる事柄のみである。

以上を踏まえて「尊敬」と「愛情」ならびに両者の「合一」にアプローチするべきだが、残念ながら「徳論」の上記テキストと、愛情と尊敬が取り上げられる「徳論」の序論「義務概念一般にたいする心の感受性の情感的基礎概念」のテキストは錯綜しており、研究者のあいだでも行論そのものの整理が議論的になっている。カントが用いている「行為の愛情」[amor benevolentiae]と「愉悦の愛情」[amor complacentiae]との区別もなかなか捉えがたい。

そこで本稿は、義務感受の情感的基礎概念としての愛情と、友情の構成要素としての愛情とを

区別して、前者についてはむしろ「隣人愛」[Nachstenliebe]という語をもってそれを呼び、共同存在の気分と理解すべきであり、後者については「実践的愛情」[praktische Liebe]という語をもってそれを呼び、情動性を帯びた意欲の事柄として理解すべきだと提案した。遺憾ながら紙幅の制限もあって、本稿はそこまでで中断されている。

(3)まったくの偶然だが、本研究計画期間中(平成30)に、現代的情動研究の全4巻におよぶリーディングズ *Philosophy of Emotion*. (Ed. By Aaron Ben-Ze'ev, Angelika Krebs. Routledge, 2018.) が刊行された。60 を越える重要論文が収められているこの文献は科研費補助金がなければ購入困難なほど高価であり、内容的にもとても優れたものであるが、それゆえに検討と吸収には労力も時間もかかり、まだ十分に活用し切れているとは言いがたい。いわゆる自然科学的な心理学の分野においても、進展著しい脳科学の分野においても、研究のありさまは流動性が高い。くわえて、いわゆる人文社会的な分野においても、感情史という新しい研究動向が出現してようやく日本でも注目を集めつつある。情動的なものの研究はほんとうに多種多様な分野において多種多様な角度から今なされているのだとわきまえて、これからも自分なりの研究角度で前に進んでいきたいと考えている。

カント研究そのものにおいても、たとえば、*Kant and the Faculty of Feeling*. (Ed. By Kelly Sorensen, Diane Williamson. Cambridge University Press, 2018.)や *Kant on Emotions*. (Ed. By Mariannina Failla, Nurua Sánchez Madrid. Walter de Gruyter, 2021.)など、情動というパースペクティブでカント哲学のさまざまな局面を捉え直そうとする動向がようやく表立ってきた。私はおよそ四半世紀前にカント哲学において感情が果たす役割は大きいと主張した(『カント事典』、1997、弘文堂)のだが、そういう人間としては一定の感懐をおぼえざるをえない。

(4)以上のような研究を経て、今後の研究の方向設定として、『判断力批判』を「人間の、個物との情動的遭遇」と表記可能なテーマで、別言すると「人間の経験的現実」というテーマで読解する見通しを手にすることができたと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹山重光	4. 巻 50
2. 論文標題 友よ、友なんて、いない。 カント理解のためのノート	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『紀要』	6. 最初と最後の頁 15-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹山重光	4. 巻 47
2. 論文標題 穏やかな憂鬱 カント理解のためのノート	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 和歌山県立医科大学医学部教養・医学教育大講座『紀要』	6. 最初と最後の頁 13-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 オトフリート・ヘッフェ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 530
3. 書名 自由の哲学 カントの実践理性批判	

〔産業財産権〕

〔その他〕

・竹山重光のWeb Site. <http://www.wakayama-med.ac.jp/med/lasphieth/index.html>
 ・書評：J・エルスター『すっぱい葡萄』、図書新聞3385号、2019年
 ・書評：永守伸年『カント 未成熟な人間のための思想』、図書新聞3435号、2020年
 ・書評：O・オニール『理性の構成』、図書新聞3493号、2021年

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------